



町民文芸

只見短歌会 令和六年十一月詠草

朝露の少なき庭の花々に水を補ふひとひ一日始まる

目黒 富子

関谷登美子

晩秋の風にそよぎし軒下の一株やさしコスモスの花

立花 奏音

二歳児が口づさむのは懐かしの童謡よりも令和ソングス

新国由紀子

豆を挽き淹れたてコーヒー啜りをりひと時忘るる忙せはしき日々を

渡部ヨリ子

頬つたひ流るる汗が地に落ちて雨かと空を見上ぐ畑中はたなか

只見俳句会 十一月定例会

日高俊平太 指導

新米を新米と言ひ頬張りて

修 一

遠山の小さく見ゆる柿紅葉

柿もぐや歳を忘れて脚立から

一 恵

畑草を夢中に引くや虹の端

信

不条理の政治はともかく秋うらら

睦 子

不器用も高倉健なり冬紅葉

秋晴れにくるい咲かな月見草
盆の月イベント遠く去りにけり

都

恒 夫

新札をサイフの奥に秋の昼

秋雲や動くことなし動き有り

裏山に祖父の愛でしか青木の實
銀杏枯る百姓俳人移山子えざんしよ

味代子

予定事少しちがつて去年今年こぞことし

尺八や夫のスースーすきま風